

岩波
講座

日本文学史 第十二卷 近代

記録文学の
歴史とその現状

杉浦明平

岩波書店

記録文学の歴史とその現状

杉
浦
明
平

記録文学は、残念なことに、われわれの国では、文学の一つのジャンルとしてまだ十分に確立されていない。さいきん、文学だけでなく、芸術の世界全般にわたって記録的なものが求められ、記録芸術の会が成立するまでになったけれど、それはまだ前衛的な運動であって、国民生活全体の文化的文学的要求にはなっていない。

したがって、だいたい記録文学がどんな領野をもっているかすら、はっきりしていない。たぶん、いわゆるルポルタージュだけでなく、紀行、自叙伝、伝記、日記、手紙まで含まれるであろう。厳密に検討すれば、日本独特の私小説なども記録文学の一種かもしれないし、いわゆる随筆なども同類かもしれない。が、ここでは私小説や随筆は問題の外におきたい。外国だったら、われわれの心境小説のほとんど全部はジェフリーズ流のエッセイ文学の中に分類され、ロマンにもノヴェルにも数えるわけにはゆかぬであろう。「一つの庭」や「道標」もイッヒ・ロマンというより自叙伝ないし旅行記と見るべきだろう。が日本では実名を用いなければ小説として通用するらしい。いな、そのばあいには、かならず、ただ芥川竜之介が柳川隆之介等として変えられるだけではなく、現実や事実のもつ鋭い圭角が磨り減らされて、適度に肌になめらかにさわるように甘くされるという代償なしではないのである。それは、きびしいリアリズムに耐えない国民的歴史的弱さと無関係ではないようにおもわれるが、このジャンルの境目のあいまいさが、逆に記録芸術の確立を妨げてきたといえよう。

しかし記録文学には、日本文学史の中で、しばしば出会うというだけでなく、文学史の重要な部分を占めているのを見る。いや、芸術とくに文学というものは、どんなものでも、記録的なものの蓄積の上に育つのがつねらしいから、あえて歴史をくわしく溯る必要はあるまい。われわれのばあいには、古代末期の物語文学と女流日記、戦記物語と戦

争記録、浮世草子と遊里案内記の關係を見ればわかる。もっともこれらのばあいには、記録そのものが多少とも近代科学や実証主義の洗礼をうけた現代のそれと質を異にしているもふしぎではない。

「増鏡」のように、ぬじのゆるんだ作物は別として、「方丈記」「神皇正統記」また「保元物語」以下の戦争物語を見ても、記録性と文学性とは対立しながら成立しているのではないか。「吾妻鏡」にも、フィクションがまじっているが「平家物語」ともなれば、当時の芸術観によって按配されて完全に創作となっている（「平家」における記録と創作との關係については、石母田正「平家物語」岩波新書 昭和三十二年にくわしい）。にもかかわらず、それは記録の上に発達したのであって、その美文のところどころに母斑の残っているのを見出すことができる。これにくらべて「方丈記」においては、現実世界におこった事件ないし事實は、著者の詠歎の動機にすぎず、あの変革と危機にみちみちた時代におけるもろもろの体験が厭世観の裏づけをするものとしてしか、処理されていない。一つの事實の記録のもつカチンとしたものは、一般性のうちに溶解されてしまっているのである。

しかし日本の文学が記録性を忌んできたことはほんとうだ。それは、事実や真実を事実、真実と見ないことであって、下からいえば政治的なものからの退避であり、上からいえば、支配階級の世界観のおしつけ、つまり、文教政策にはかならなかった。文学者も、文学を研究する国学者、国文学者も、日本文化の特質として記録的なものをみとめず、もっぱらもののあわれの的なものをもてはやしたことは、一つ一つの事実のうちに宿る被支配階級の声に耳をふさいで、もっぱら上意下達に奔命していたことを示す。つまり日本の文学者はいつも支配階級の文教政策に乗っていたわけである。だが、それに順応しない読みもの、書きものが、足利末期、中世的市民の発達いらい、とくに多くあらわれたことは否定しえない。戦国時代の庶民また下層武士の体験をば、その生まのことで、もっとも強いアクチュアリティをもって、つづった「雄兵物語」「おあん物語」「三河物語」がそれであったが、文学史家はこの生氣にみちた文学をかれの同業である教養者のつくった五山文学や仮名草子や、さらにくだって、もろもろの江戸文学以下のも

のとして、文学の歴史の中にすら取上げなかったし、今も取上げていない。

徳川時代には、新井白石の自叙伝「折焚く柴の記」をはじめ、甲陽隠士「世事見聞録」のようなすぐれた記録文学のほかに、おびただしい随筆が書かれた。しかしそれらの随筆は、多くは記録ではなくて考証であったように思える。この時代の文人たちは、かつての雲上人とおなじく、現実の貴重さをまだ認識できず、もっぱら過去や伝統や有職故実、故事来歴のうちに文化的価値をみとめていたのである。ただ、荻生徂徠（政談）、海保青陵、本多利明、山片蟠桃等の政治経済論の文体だけに、具体的なものから生れる緊密さと強さが見られよう。それらは、いわゆる日本文学のもちえなかった緊張と充実とをもっている。たとえばイタリア文学史では、マキアヴェルリやグイッチャルディニの歴史や事実の記録や政治論が文学の一つの主要な源流となって、今日の文学にまで影響しているが、われわれの成長に資することなく、また、つねに経世済民論の中から伸び出ることもできないでしまった。紀行もたくさん残っておるが、芭蕉の「おくの細道」など、文学化されているだけに記録性から生れる充実と具体性とを欠きがちである。江戸時代において、記録文学として挙げられる唯一の作品は杉田玄白（すぎた げんぱく）「蘭学事始」（岩波文庫）であろう。

この「蘭学事始」は、菊池寛の現代語訳によって有名になったが、原著の方がその素朴な充実さと簡潔な豊富さにおいてその翻案たる近代短篇小説をはるかにしのいでいる。玄白の原著は、蘭学の移植をするための先人のもろもろの苦勞、「解体新書」の翻訳にあたっての協同研究とその苦心等をのべることによって文化史的資料であるのみならず、さらにそのもろもろの苦心の体験が記録の中にもこまれることによって、記述の一行一行に感動的なアクチュアリティが賦与されるにいたったのである。

辞書らしい辞書も、参考書らしい参考書もなしに、オランダ医書「ターフル・アナトミア」に向ったときには「誠に鱸鮓なき船の大海に乗り出だせしが如く、茫洋として寄るべきなく、只あきれて居たるまでなり」というのも、「譬

へば、眉といふものは目の上に生じたる毛なりと有るやうなる一句、彷彿として、長き日の春の一日には明らめられず。日暮るるまで考へ詰め、互ひににらみ合ひて、僅か一二寸の文章、一行も解し得ることならぬこと」であつたのも、もつともである。あるいは、玄白や良沢らの空しく費したエネルギーと苦心とはそんな生まやさしいものではなかつただろう、が、それは以上のような二三行にこめられている。もつともこのていどの記述なら、べつに感動を引きおこしはしない。がそれにつづく次のような実例は、記録的文学の蓄積の上に立たない文学では創作されることができなかった。じつさい、日本文学史では、このような感動的なデテールをもつた作品にかつて出会うことができない。

又或る日、鼻の所にて「フルヘッヘンド」せしものなりとあるに至りしに、此語わからず。これは如何なる事にてあるべきと考へ合ひしに、いかにもせんようなし。其頃「ウォールデンブック」といふものなし。ようやく長崎より良沢求め帰りし簡略なる一小冊ありしを見合せたるに、「フルヘッヘンド」の釈註に、木の枝を断ちたる迹、其迹「フルヘッヘンド」をなし、又庭を掃除すれば、其塵土聚まり「フルヘッヘンド」すといふ様によみ出だせり。これは如何なる意味なるべしと、又例の如くこじつけ考へ合ふに、弁へ兼ねたり。時に、翁思ふに、木の枝を断りたる跡癒ゆれば堆くなり、又掃除して塵土あつまればこれもうづたかくなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、「フルヘッヘンド」に堆といふことなるべし。然れば此語は堆と訳しては如何といひければ、各々之を聞きて甚だ尤もなり、堆と訳さば正当すべしと決定せり。其時のうれしさは、何にたとへんかたもなく、連城の玉も得し心地せり。

「蘭学事始」が記録文学として生きているのは、ただ日本における近代科学の誕生を記す記録であるだけではない。もちろん、取扱われた事件の歴史的意義の大きさは、記録の文学的価値とかなり大きくかかわりあうものだが、それだけではなく、この書の文学的価値は、その記録された事実の重大さが適切なデテールによって保証されているところにあるといえよう。しかしこの書のもつ問題は二つある。一つは、この書がどういう意図で書かれたか、という問

題、他は、この書が文学史においてどのように待遇されたかという問題にほかならない。

第一の問題については、「解体新書」の翻訳団の一人杉田玄白が、その死にさきだつ三年前、八十三歳という老齢で、絶筆として、子孫後世のために書き遺した回想録だということである。近世初期にあらわれたアクチュアリティに溢れた記録文学「雑兵」「おあん」等も、ほぼ同様の条件下に語られ筆録されたように見える。共通するところは、かれらの生きてきた過去とその経験に何らかの価値を、半意識的に感じて未来につたえようという自信以外ではない。雑兵や平凡な一女性が歴史の激変期の中で最大の歴史的事件に片端ながら参加したという意識が、これらの回想文学を書きのこさせたわけであるが、「蘭学事始」のばあいにも、「解体新書」翻訳後における蘭学の急激な発達が、老いたる玄白をして、四十数年前の苦心の意義をあらためて意識させたのであろう。記録文学は、その記録される事がらの価値を信じることなしには成立たない。清少納言は、宮廷の年中行事は書きとめたが、農民の生活を記録しなかった。そんなものに価値と意義とをみとめなかったからである。（彼女を責めているわけではない、事実をのべているだけだ、その点誤解なきよう。）いな、江戸時代におびただしく残された随筆なるものを見ても同様である。この随筆の中には「個」は存在しない。「個」人が生まれるのはブルジョア社会だから。封建社会の地主や武士の中には「私小説」の書かれる条件も成立していなかった。だからこれらの随筆にも、そこに織りこまれた和歌などにも、個人的生活もなければ、また筆者を取囲んでいた人民の生活も、興味の対象となっていない。かれらの関心は、もっぱら古書つまり古代や中世の宮廷文化の中で生れた故事来歴についての引用、でなければ、ものめずらしやかな珍談伝説だけであった。隠居の興味であって社会的活動にかかわりあう人間のそれではなかったのである。ただ伝説民話のなかには、きわめて幾重にも屈折して民衆の生活がうつっていることは、ほんとうだが、その筆録者たちは、自己の人間価値も信じなければ、民衆のそれをも信じず、ただ話のめずらしさに感心して書きとめたのである。そこには徳川封建制の圧力も感じられるのであるが、問題はその因襲が今日まで日本文学の中にぬきがたく残っている点であらう。

というのはこれらの随筆が、ほとんど非記録的であったことが、今日の文学をも傷つける基礎となっているからにはかならない。というのは日本の文学世界では、今なお、有閑マダムや高等下等兩級の売笑婦や、知識階級と称する非生産的階級の酔払いたちの、愚にもつかぬ述懐や聞書は文学の中に数えられているけれど、農民や紡績女工その他生産階級の書いた記録は、非文学としておとしめられているからである。しかも記録であるから文学ではなく、手記みたいなものであってもいくらか虚飾がほどこされているから文学であるというような分類法なのである。そういう分類が一般に通用しているのは、江戸時代の隠居の精神と変っていかないことを示すものではないか。文学精神の衰弱をありのまま露出しているのではないか。スタニスラフスキーのいうように、「たとえ嘘そのものをも、芸術であるためには真実にしなければならない。芸術には「われわれを高めるだまし」が存在すべきである。しかしこのだましは真実と何一つ矛盾すべきではない。芸術のすべての秘密は、嘘を「真実に変える」ことにある。」が日本の過去の文学は、真実すら嘘に変えることではじめて文学としてみとめられたようである。

それというのも、事実の文学的価値を知らなかったからであった。西欧のばあいを見ると、かならずしも現実主義者とはいえない文学者でも「記録文学の書きとめる些細な事物の底にこそ、現実が包含されているのだ」(ブルースト)ということを知承していた。ただ、かれらは「こうした事実は、そこから現実を解放しないかぎり、それ自体では何の意味ももたない」と主張する点で、われわれとくらべて、芸術至上主義者なのである。にもかかわらず、記録的な基礎のうえにのみ文学がなりたつことをわきまえていたことは、日本の近代文学者とちがう。

二

近代に入ってから、日本の文学は江戸の戯作の伝統から断絶されず、従って上に引いたような文学の根底にある

べき記録性を無視してきたために、近代小説の発展がおくれかつゆがむとともに、記録文学の成長もはばまれた。文学史によれば、明治初年に早くも「冠松真土夜暴風」「かんりまつまつのよあらし 薙旗群馬嘶」むしろはたぐんまのいなぎ というような農民一揆を主題とする時事小説や蘭学者の彈圧、また勤皇志士の悲劇やをつづった実録小説が出版されたが、その内にはドキュメンタルな要素がとばしかった。けだしそういうのはげい素材は、痴人の太平天国といわれた江戸町人の文学形式だった戯作によっては処理できなかった。したがってこれらの実録ものは、従来の戯作的鑄型にはまらぬ部分をきりすてることによって、同時に個々の事実にのみ包含される現実性をもきりすてしまった。つまり、事実をまったく戯作的型に改ざんしてしまったのである。そのようなところには、新しい文学の胚芽も存在しないし、また、記録文学そのものの成長を見ることができない。つまり、そういう実録ものは、新しい文学の生成とかかわりがなかったどころか、反対に新しいものをばじぶんの方にひきよせることによって、妨害したといっている。

だが、明治時代に入れば、さまざまな記録的文学があらわれる。たとえば旅行記、伝記、自叙伝、日記、手紙、文字どおりの記録等々。とくに紀行はじつにひろく流行したらしく、大橋乙羽おおはしおとわ（明治二年—明治三四年）（一八六九—一九〇一）や、田山花袋（明治四年—一八七二）等、何冊もしくは十何冊かの旅行記を著した。今日でも洋行帰りはかならず一冊ずつ旅行記を出すのがならわしらしいが、明治時代にも、海外国内両種の旅行記がとみに増えているのである。

それは、日本人が開港とそれにつづく近代化の過程であまたの変化と新しい世界のひらけてくるのを見、かつ体験したことの反映であろう。明治維新いらい、わずか四五十年のうちに、日本人は、西欧のルネッサンスから独占資本の時代まで、五百年の歴史を短縮して経過せねばならなかった。明治初年の十年は、江戸の一世紀二世紀に相当したであろう。したがって近代へ、どんな欲望をもって立ちむかった。西洋崇拜というような気分の生れることも避けたかった。欧米の文物をじかに見物してきたことが十分自慢のたねとなりえたこと、徳川時代の田舎ものの江戸見物、京見物の自慢ばなしと変りはない。そういう漫遊記以上に西欧の社会や文化にたいする批判がほとんど見られな

いことに、この時代の特性があった。つまり、西欧にたいして対立させる自己をもっていなかったのである。封建的な、主体性欠如のままでヨーロッパをまわったし、ヨーロッパ文明の波にまきこまれて酔ってしまっただけである。それというのも、明治維新は、農民一揆や自由民権運動によって、かなりの国民層を交革の動きにまきこんだけれど、やはり、量的にも質的にも、国民的生活の底までゆりうごかして国民意識を下からかもしたすに成功しなかったからであった。内乱はおこったが、それは反動側からであった。反動すなわち旧封建階級以外に革命的エネルギーの爆発がおこなわれぬように歴史的にも国際的にも装置されてあったのである。そしてその国民的主体性の欠如という弱さはその後ずっと近代日本を性格づけることになる。

われわれの文学にも記録文学にも、当然その国民的性格の欠陥が烙印されないではすまなかった。もちろん、明治時代には、まだシュールレアリズムにたいする要求もなければ、その発生する条件も存在しなかったから、今日の前衛芸術、また、記録芸術がつくられなかったなどというのではない。ただ、近代文学は海外文学の輸入と戯作からの転向とをもってはじまったといたいたいのだ。さきにあげたように、江戸時代にもドキュメンタリーはたくさん出ていたのに、新文学は、ぜんぜんそれに脚をおいていなかった。ということは、近代文学がその出発からして日本の現実と微弱なかわりしかもちえなかったということの意味している。ロマン主義も写真主義も、たくましい根の上に育つことができなかったのは、出発の日に宿命づけられていた。

しかしながら日本人が明治維新後、今まで経験したことのない新しいひろがりを見たことはたしかだ。ルネッサンスの人々が遠く海外や東邦を新発見したように、封建的居住制限や移動禁止を解かれた明治の日本人は、旅行によって、空間的なひろがり追求した。日本国内そのものもまだ多少は好奇心の対象になりえたらしい。歌枕や旧蹟を求める風流、信仰、遊覧等のため、自由に日本じゅうを歩き見物できるようになるにつれて、数多の旅行案内風な紀行が書かれた。上述の大橋乙羽や田山花袋等の旅行記は、だいたいこの類に属している。がもはや芭蕉や司波江汉たち

の紀行のもつ文学的よろこびや新奇な物象への好奇心をそそらない。けだし明治の紀行もその根底では、徳川時代の風流人が残した和歌入りで旅情をたのしむだけであり、それにいくらか小商人の旅まわりに便利な道筋や宿屋の手引が附加えられているだけで、冒険にも発見にも出あうことはできない。だから、上にふれたように国民生活において旅行の機会と便宜とが急激に増大したものの、こういう旅行から地理的な、科学的な、また文学的な創造や発見は期待する方がむりである。かつての「東海道中膝栗毛」も、もうつくられるはずがなかった。仮名垣魯文（文政二年—明治二年）は、一九に倣って「西洋道中膝栗毛」（明治四年）をものしたが、ここでも舞台を西洋にとることによってのみ読者の関心をひきえた。そのことが、日本の国内旅行にもはや文学的創造の源泉がのこされていないことをこのジャーナリストの先輩が感じとったことを示している。したがって、それ以後の旅行記は、旅行案内の類しか出なかった。わずかに大正期に入って、柳田国男を先頭とする民俗学研究者が、近代の波に洗いのこされた島々や山奥に民俗の古い生活の痕をさぐり求めて歩いた記録だけが、この通俗旅行記類から除外されるといえよう。もっとも、柳田の記録は、資料の蒐集と整理の手續きであって、紀行ではない。ただ、ここでいいたいののは、国内旅行からは、こういう歴史的な探求によってしか、興味を掘りおこすことができない、ということだ。ごくさいきんでは、深沢七郎の「檜山節考」がこのおき忘れられた日本をさぐった記録として文壇を驚倒させたことをいいそえておこう。

しかし明治以後の紀行は圧倒的に日本以外、とくに西洋旅行記によって占められている。近代初期の日本の国民生活の中には、文明開化のはなやかな呼び声にもかかわらず、封建性が濃厚であったが、この西洋旅行記にすら、封建文化の類魔の一形式たる隠居じみた風流氣質と明治的小商人根性とは合作しあっている。もっとも、その反面において、たしかにブルジョア的發展は急速であって、その反映として風流などふりすてて、冒険、探險、発見への熱いあこがれが燃えていた。泰西先進文化に追いつきたい。文明開化を謳歌しただけでなく、日本は近代化を開始すると同時に、海外発展というより海外侵略の野心にも燃えている。それは、明治政府の本質とかかわりあうものであ

ったが、国民にもその政府の性格はわけもたれざるをえなかった。また、国内的に自由民権運動が弾圧されて、ブルジョア的民主主義すらうちたてえなくなったとき、急進的な民権運動家は、その欲求を国外でみたそうところみる。じっさい朝鮮で暴力革命を断行しようとした自由党最左派の大井憲太郎らの大阪事件があり、宮崎滔天たちは中国の革命に参加しようとした。文学にもその気分が反映されて、政治小説の中には、海外の革命家とむすび、海外の革命に加わろうとする自由民権活動家が登場する（東海散士「佳人之奇遇」明治十八年等）。

そういう革命の国外輸出は、明治政府の安定と資本主義の急激な発展につれて、その革命と民主主義の本質をうしななって、帝国主義的侵略の尖兵にまで変質する。陸羯南（安政四年—明治四〇年）（一八五七—一九〇七）たちの唱えた国粋主義もそういう運命をまねがれなかったとすれば、頭山滿（とやまみつる）らの玄洋社の歴史もこの同じ軌道にのって走っている。かれらは中国の革命家を援助して、大清帝国の崩解に一役買っていた。その意味では進歩的に見えるが、その援助は、軍部や財閥とむすびついて根底に中国への權益ないし領土的野心をひそめていた。宮崎滔天（みやざきとうてん）（明治三年—大正二年）の自伝「三十三年の夢」は、まだしも中国革命家へ純潔な同情をもってみたされているけれど、孫文その他を援けたいわゆる軍資金の出所が、犬養毅（かやぎよし）とその背後にいる政商である点で、滔天の主観的意図のいかんにかかわらずやはり割りきれぬものが感じられる。そのように帝国主義的侵略に変質してゆくべき運命をたどりながらも、明治時代が海外に進出しようという国民的エネルギーにあふれていたことを否定するわけにはゆかぬ。大陸に溢れでいったのは、綿糸綿布だけではなかった。若い資本主義は、じぶんらの製品の販路を開拓しなければならぬ。近代化にたちおくれた隣邦中国こそ、絶好の開墾地であった。がこの同じ獲物をねらう他の帝国主義諸国といつか衝突することを覚悟しなければならなかった。それゆえ、いくらか空想家は、平らな大陸だけでなく、人類文明の進歩からきりはなされた内陸の秘境や極地にまで進出しようところみた。

すでに明治二十五年（一八九二）に鈴木經勲「南洋探検実記」という本が出版されているはずだが、わたしはまだ見

ていない。しかしこの本の表題だけでも探検、冒険の精神が日本人に宿ったことを示している。百年まえには、海外に雄飛した天竺徳兵衛は魔法使と伝説され、さらに海外貿易をこころみた冒険家の銭屋五兵衛は処刑され、わずか孤島を調査しようと企てたばかりで華山、長英らは蚕社の疑獄に遭わねばならなかったのに、いまや、日本ではそういう海外への探検が待望されはじめた。だからそういう冒険家は、国民的英雄になりえたのである。

とくに明治二十五年ベルリンから帰国にあたって、通常の船便によらず、ロシアを経て単騎シベリア横断をこころみて成功した陸軍少佐福島安正(帰国後まもなく陸軍中佐に昇進)と、明治二十六年千島列島の占守島に移住をくわだてた海軍大尉郡司成忠とは、日清戦争前夜の国民的スターであった。二人の旅は特別な冒険ではなかった。が北方からツア・ロシアの勢力の南下をひしひしと感じていた新進国日本の目に、二人の旅行が一大事業としてうつてもおかしいことではない。郡司大尉にたいしては、明治天皇みずから勅語と金千五百円とを下賜している。それは千島をロシアから守る屯田兵的意義をば、天皇が強調したことにほかならない。

福島少佐のシベリア横断については、もっと数多の本がつくられた。新体詩や江戸の読本仕立ての絵入り本から、錦絵、玩具(むさし)にまで、福島少佐の遠征談はもてはやされた。今日なら、さしずめプロ野球の長島選手とか相撲の若の花というところであろう。その当時流布したシベリア横断記によれば、肋骨入りの軍服を着て、馬にまたがった福島中佐(そういう本ではすでに中佐になっている)は、ただ人跡まれな荒寥たる広野や森林や野獣や悪天候を征服しただけではない。たえずおぼけや怪物の出現を見て、これとたたかい、これに打勝つこと、ちょうど岩見重太郎がひひその他を退治したがごとくである。福島中佐は講談の主人公になってしまった。たくさんシベリア遠征記のほとんどすべてが、シベリアをば妖怪変化の棲息地以上の場所として物語っていない。したがって福島少佐が数千キロの人跡稀な荒野を跋涉しぬくためについやした精神と肉体とのエネルギーを描こうとしていない。もつともシベリア横断は、管見のかぎりでも、これより十数年前の明治十一年(一八七八)当時のロシア特命全權公使榎本武揚(一八三六—

明治四一年（一九〇八）がペテルスブルグよりの帰国のさい、実行している。しかし、榎本の残した「シベリア日記」によれば、その二ヵ月にわたる大旅行は、かならずしも荒野の旅ではなかった。もちろんヨーロッパ文明諸国の旅行と違っていたことは、榎本と福島のおいだに旅行したチェーホフの「シベリアの旅」等の小説でも明かだ。ともかく榎本は、ペテルスブルグからニジニヴゴロドまで汽車、そこからペルムまで汽船、それからシベリア東部のストレチエンスクまで馬車、その後はさらに汽船と馬車とを乗りついでウラジオに出ている。これによれば、シベリアも荒野ではあるけれど野蛮人や妖怪変化の出没するところではなかった。ただし福島少佐の英雄視されたのは、そういう多少とも文明の利器を利用せず、馬をかけてシベリアを横断した点にあった。それにしても探検記のよろこびは、ばけもの退治にあるのではなく、おびただしい困難を克服してゆくさいに集中的に発揮される人間の能力の緊張と可能性の極限にふれることによって、読むものの内部にそれにゆすぶられた緊張とエネルギーの湧出をおぼえるところに存するが、そういう記録は歓迎されなかったらしい。けっきよく福島中佐シベリア横断も郡司大尉の千島遠征も、またそれにおくれておこなわれた白瀬中尉の南極探検も文学的には実りを結ばなかった。ただ当時の領土拡張、海外雄飛の雰囲気は、いわさな巖谷小波（明治三年—昭和八年）の少年読物「新八大伝」や江見水蔭（明治二年—昭和九年）の冒険小説等にくらか残っている。こういう辺境地域の探検記のうちに、たった二つだけ、今なお生命を感じしめる本がある。一つは河口かわぐち慧海の「西藏旅行記」であり、他は日野強の「伊摯紀行」であろう。

河口については後でふれるが、まず日野の「伊摯紀行」についていうならば、これこそ明治の探検記の総括とでもいうべきであろう。第一に、日野もやはり陸軍少佐であり軍命によって当時としては世界にとざされていた、中央アジアを調査して歩いたのである。第二に、その時期は、他の探検とちがって、日本が日露戦争に勝ち、決定的に帝国主義へ踏みだそうとした明治三十九年（一九〇六）であった。したがって、その旅行の目的は「今や世界の風雲は東大陸を駆りて竜驤虎搏の地域と化せしめ西人の侵略的大野心、占利的大飛躍は澎湃として岩礁に激する怒濤の如く清国

全領土に瀾漫し来り颯々として巨屋を倒す颶風の如く所謂外交問題を掀翻し老然たる老大国の前途をして転た寒心に勝へざらしむるゆえ、つまり、老清帝国の弱化に乗じて帝国主義諸国がそれぞれ野心をたくましくするとき、獲物の分配に有利な地位を占めるために、中国国境を踏査して、英露の進出に対抗しうる資料をあつめようというわけであった。日本軍部の遠大な大陸征服計画の一環としての調査にはかならなかった。今までの探検も、軍と無関係ではなかったが、日野のばあいは、軍の使命そのものであった。もはや一二の冒険家にゆだねておくべき時期はすぎ去った。いずれかのおり、軍の作戦に役立つべき軍事的資料が求められたのである。したがってその紀行の質も、従来の探検記とことなっている。今までの探検記は、何といっても、その基調において、ロマンティックな色彩が濃厚であって、しばしば他愛ない少年向の、冒險小説以外ではなかった。が「伊犁紀行」はそうではなかった。

この旅行そのものは、奥大将の序文にいうとおり「遠ク沙漠不毛ノ境ニ入り又峻嶺ヲ越エ峻壑ヲ涉リ寒暑瘴癘ヲ冒シ困苦欠亡ニ耐エ勇往邁進」其行程水陸七千余里ニシテ月ヲ閱スル実二十有六」であって、じっさい、その困難さは福島少佐のシベリア横断にまさるともおとることはないだろう。がしかし紀行の文体も叙述法も、根本的にちがっている。すなわちこの紀行は、「一介の武弁」の筆になり、「概ね余の実地視察せしものに係」り、それ以外の人種、宗教、歴史等にかんする記載は、東西の著書から採っている。上巻、日誌之部つまり旅行記、下巻、地誌之部から成っている組立てからも推察できるように、これはあくまで報告記録の正確さを期したものであって、いわゆる文学を目ざしていない。にもかかわらず、いな、そのゆえに、天山越えや崑崙山脈、ヒマラヤ山脈横断の行路の困難さが、彷彿として迫ってくるのである。

葉爾羌よりレーに到る約三十日の行程中其の十六日間は無人の境、生物として棲息するは、単に狼豺、鷲、鴉鳩の類のみ。又処により「バルゴン」と称する灌木叢生せり。該灌木は生木の儘打て薪材と為すべく、其茅は馱獸の食と為るも、草少なきが為め已むを得ず食ふものとす。然れども駱駝は之れを嗜好すと云ふ。無人境の前後に

は、多少の寒村間在せるも、秣は兎に角、糧食は容易に之を求むべからず。

そういう世界の屋根を通過するために九月十五日ヤルカンドを発し、無人の境にて燃料欠亡のため馬糞を焚き、生きた驢馬の眼をねらう鴉や狼群に送迎されながら、海拔一万八千五百五十尺のカラコルム、一万七千八百尺のセル嶺等をこえ、氷河をわたり十月二十七日ついにインドのスリナガルに達するまで、事実のみが簡潔に記述されてある。狼群も目の前を走りすぎるだけで、襲撃するわけではないが、その記述は事実の重みにしっかり支えられて動かすことのできぬ説得力をもつ。このような正確な記録であるゆえに、時の流れに磨滅される部分がすくなく、おそらく記述当時とあまりかわらぬアクチュアリティをもちつづけているにちがいない。この「伊犁紀行」は、あらゆる意味で、福島中佐シベリア遠征記以後の明治の紀行のさいごの結実であった。

しかし、上にもふれたように、これらの冒険、探検の主人公はすべて軍人であったというところに、日本において探検記が十分な開花を見ないでしまった理由の一つがひそんでいるのではなからうか。かれらは、軍事的スパイであって、自然科学や歴史や社会問題の上での発見を志してはいなかった。そしていつも上官の命令を負わされているゆえに、自由で独立の精神によって活動する余地がなかった。積極的に困難にぶつかり、そのものをきりひらいていくという情熱に欠けていた。それゆえに、その主人公じしんの執筆するものは探検記というより紀行におわり、受け身の難儀や苦痛には出あっても、こちらから働きかける冒険というものではなかったのである。

しかし日本にもたった一人だけ冒険家がいいた。それは「西藏旅行記」の河口慧海師にほかならぬ。かれの本の名には旅行記より冒険談、探検記というほうがよりふさわしいだろう。かれの探検の特長は軍事的意味を帯びていないという点にあるが、この点こそ、この辺境旅行記を日本近代の記録文学の最大傑作の一つたらしめた重要な因子ではなかったろうか。というのは河口は、明治三十年代の初め、仏教の原典がとざされたラマ仏教の国チベットに残っているのではないかと考えた。日本の仏典のほとんどすべては、中国を経由しており、それだけに内容も重訳をかさねる